大和小学

天

やまと小學

古二二

序

唐虞三代の むかしハ小学大学共に学校あまく
その おしへをうけざるものなかりき 孝経乃指掌書也
かゝる 孝乃指掌書をやすく 儒を坑するよりも
好ハ大小の書も亦灰燼となりぬ 嗚呼 秦の暴虐 甚矣
宋代よりこのかた程子朱子の学を述 経
よく 大学の書をあつめ出 世にあらハし
給ひぬ小学よりてハ あとかたをなくなるを

朱文公先生注解の書中より
要領を摘み、内外の差等を知り、
よく修めて、初めの志を遂げ、親を尊び養をうや
まうの方を考えしむるものなり。その理あるべきを
を修め人をおさむる道を具足せり。八歳より小学に
いり、十五歳より大学にいるにおよんで、その道おのおの
その業の差別あるべきものなり。その理を左のごとし。

小学はその事をおこなうべきゆえんの大学の
明法(セイコウ)をおこなうべきの事物の中にその事をなすべき人
となりて、人の人たる所を
おとなうまでにあらゆる人面獣心
日用の職分となるべきの書をよく味ひ
の学文をこころみるべし。その中に文不通
たとひその心ざしありてもせんこのふなかるべし。
りより、読解の筆法漸く本に階梯の非

立教之篇第一

此篇おほむね人物を生ずる本を述べ氣質の性と天地の性と二ありと論じ天理を明らかにして人欲を去るを要とす而して萬物いづれも一理ありて陽又新の氣ありて陰滯塞あるの中に就き人となりて靈あり而して人生れながらにして天性ありこれを教ふるの道をおよそ人たるものの本を教ふるをもつて主とす

べ〳〵七里ばかり男女の日ごろむつまじくあそびつどひ
うちそろひて会せるあたり八里ばかり乳房をおし〳〵て門下の
出入を路頭をつなぎおろし年ごろ年ごろ
の蔵を月日をそふるうをおし
いるうむをこの男女あるとるの雪の
まく〳〵男女十歳ばかりなるを抱きつれて卯つぼし
降雨をつけるを笠用ひをるふ
うちむつまじくあそべ〳〵ものの衣類をそべ
ふ草の行李をるで包をもはこの道
をるものべ〳〵十三才となれば業ををびく船
まいて十五となれば嫁まいうち場の左をるふなう二十の
早もすぎて元服し乳の世法をそびうは衣をぬの類

をき大夏のそれをはいあつくあ頃のそうをりひきろく
なるんうたてとみうく〳〵いまぶく船
却〳〵あるつをへうだ二十乃年をだ
のうくそのそれをはとむべ〳〵口ぐんぐに考びく〳〵な
み〳〵おにうぐりてあぶさ
うめて君にはうんをまをうぐ
事をめぐし矣あるんうと考し
君臣のあいだたがひと道をうる〳〵おそれおそんは恐べ
沙唯をやしまう〳〵年にうり
むはうり
女ろい十歳乃時うつうぐ
なんふ行状飛風をおう〳〵てし

をうまひきく契（ロッ）くふたりと
うそなりうしる布の天理て
なりへそちひそるよ父なあいし
他人と差別してあいそぶまでも
おもう朋友なるとをもう
藥（ヤク）とはよ余ごてもえそ
婚ふに樂のそちをなへそ布
の倫をそふそちるゆへよ人そ
をなあなそすうすちめそ
やそちうるもやるやりるとしる
そそあるふのへをそひおろそ
をなへあふよそ布之侍奇をふひそ

律（リツ）てうふひ八音（イン）にあるへて樂をひよく調（トノ）りねまへ神明
人鬼も感和そ布ふとなん
周孔の大司徒（ダイシト）よけふ一百二十の官府
布民におしまに德と行（コウイ）と藝
なうひ得ふいてるとあれ
布之一つよ德をおへまるよ知行
知とうぢふよあの理をふうそ
もそる理なう重とう事（ジツ）物乃理
あれを到してふしれよるうえ忠というおまふおそふをは
くす事之和という色と肯たぐひ
へふ法之二つよ釈ひをおへまるに善友（ゼンユウ）膳（ホウ）
あう善（ゼン）とはよく文冊にほふ法

睦とハまづ親類にむつまじむるなり　姻とハ妻のかたの親類と
むつましむなり　任とハ友達にまことをもつてまじはるなり　恤
とハうれへにあへる人（貧人）を憐むなり　此六ツハ行ひなり
此の行ひ之二ツに芸をわかつ　礼楽射御書数の六ツのことなり
礼とハ礼義　楽とハ音楽　射とハ弓　御とハ馬のる法　書ハ手ならひ
数ハ算用なり　此六芸にも又礼六ツ楽六ツ射五ツ御
六ツ書六ツ数九ツそれぞれの法あり　しかしのこまかなる事ハ文しげきゆへ
略す　已上の六ツによく通じたる人を選び出して
公儀へ差上るといふなり　又罪ある人を刑罰する
に八ツの罪あり　一ツには不孝なる事　二ツには親類を疎略に
する事　三ツには妻の方の親類をあなどる事　四ツには兄を
うやまハざる事　五ツハ友をあざむく事　六ツハ人の困窮なる
をあはれまぬ事　七ツハ業をいとなまぬ事　八ツハ人をまどハしていつはりを云ふ事なり
礼記の王制にいはく　毛詩尚書礼書楽書の四ツの教へハ
先王のすぐれたるしるべにて道をなす　楽官の長に付たるに
此教へを出する事のにあらしなる　春秋ハ礼楽のことを教
冬夏ハ詩書のことを教ゆるといへるも文をたがひにしてゐる事なり
管子の弟子職にいはく　弟子たる事ハ師の教へをならひ
のぞむにハまづ心を虚しくしてむなしくして其の教へ
をうけまなぶハ師の事を身に法をせんとしてゐ（意）
をみなそなへあはせ一ツの義をまなびて是を行ふべし　師
にはなれざるも教につかふる事ごとくまなびなれば其わかつ事を
おのづからうやまひ従ふべし（く）　それおごる心なく　驕慢をもちる
ところなきのまなびハかはらず　ならぬ心あらば行ひを正

くまるおもむきをしるべし出大せきひとへに油ある人
のそちつきそさしをかゝあふうつきをたゞしくまつと祖
門人にはくしをふくして教をうけ
あけくもりへの左をはとあるびんのはくしをいさゝか
ゐる事なきを専とすることの
孔子のたのひと人の弟(オトヽ)子の人のまるもの、行ひ
なのうちへいりて教を布をまつ
うやまひてお人をよ左を沙(ヨコナ)のつもと
とはくそをてゐうる事をいそ
するにいづれ世の人とひとくま
左をある人をたつとをまつ行のとく行ひを専用
とはとあてそかの付人をあつまるを行ふべき事しなきいとま
にいつてつ又学みして重賢の書をよむべし
又のまひ一つ人の弟をおさむるおも
なるといひくを強よ西風書風の卵正あるをうひたゞし
待をうひくまにそくよおくいふ魚に
をまるこれなるをうひくいんをはくしをかゝ
ちをうやくまするにをうてゐ男をたゞしく
しておうに楽をなうてつまるとたゞんも
とあてたゞひと和して音楽をまく性情をやふけまる油
をおおそまるとを
礼記乃楽記をおけるか礼楽の
うまるをあんなまでゞ人しることの付
左をおかふべきをまくつ

倭小學 卷之二

明倫 篇第二

此篇は人倫のみちをのべしめす
父子夫婦長幼朋友の五倫の理をあきらかにする事なれば
あひだに孝悌忠信などの諸善を具足する事なれば
なれども男女の礼義をあつかふ門なれば男女ある
事をあきらかにいひ出したるなり人間の行ひ道天

他の同よ（アイ）五つのかゝ夫婦の在をあそうよをるを人の
人しるそとかゝこはおうの道たゞひるがかてう人ろそし
んかを教育とれとするべきをれをいのん乃
師ばゝ学校をそくのひく八蔵の時より山学にいれ
おやよう大学よいもひくおうなれば
おのよ倫のそうをあそうにせ佛法の道
多言語ありとゝ夫婦のかゝ
未よ聖賢の教をもさ夫婦の
くゝおあ（於）

父母乃部

孝礼祀乃内則よ子ふかゝ
ゝゝゝあよたうおまう法銘をゞめてなく
類をそうち

神をおゝそくあるひにそ養（サヨウ）をあゝうあく
いそゞ父母習妬の称一門親をそ
ひをるつはする物をてあつくつ
まくかゝ海すねうとはおいゝせ
うあ記おそう海すねうとはおいゝせ
それくよそうゝをにをいそて生
山のふはをうそて生
号あさこのかゝひをねそいて
たうをもそうはるをねひのひく
するのはをおてまいゞ
ひをうてそ動ゝそ蔵そさる
をきをおあいゞまあうそくを

論語よみけるに父母在の間いかゝ
ゝる事のあるをかゝのことなるを教ふる
わかたさるゆゑあつて汚ふ
ある時に教その右をいつくとゝ
そくるく又用ありてよび給ふ
礼記ノ曲礼よみけるに父母在の間いかなる
ぜぞとひくおぼつかたのまれよまでいのちを捨
ことのなりとゝ
同しく培記よみける、父母在るつ
勝負をするごとのふぜ我ま
まりくてなるとをのまにしてたそく
自由せまんとおもふ
同しく内則よみけるに人のまし
しのたらをもたれるゝのしり
なくるゝをかゞむるをかゞ
ゝとゝもあるまじきことなり
ねのそまに事をいはるゝ教訓の方より
ゝとゝもあるをうけひとそくめ
おゝもひ一付のこくをとゝ
まりそれそうけのそ
めてねをかゝるこくよいは
しまさんとおもふ

りてねるしかるを
せぬとのゝこと
同しく内則よみけるに人のまし
しのたらをもたれるゝのしり
なくるゝをかゞむるをかゞ
ゝとゝもあるまじきことなり
ねのそまに事をいはるゝ教訓の方より
ゝとゝもあるをうけひとそくめ
おゝもひ一付のこくをとゝ
まりそれそうけのそ
めてねをかゝるこくよいは
しまさんとおもふ

おとうあひてさき申ありそ
そゝとそゝとあゝとうがひ月ん
月ゝゝ巽よそみる、教と師
いまてよびおゝ付ゐて
ゐる
○儀礼のお相見礼(ソウケンレイ)よそみ
国法ひのかとうあり大人
えくゝやあけらふゝゝやあけ
よやあけてのほぎりの、師伯(シハク)の御
ふゝてるあそおとうふ
ゆうめんあるうなきうこえあそ
ゆうにほゝゝむ教の御あり

せそそうだきひをそくくえゝ
気をほるこのをゝあるけ
をゝまかをこぬこの
外法そんと御気をん
えるこ
○礼記のお薬よそみる教のめ
てこんぞよあるねよあるねをけそ
ゆくゝゝこ外方ゝおくゝ
あうそ行御ゐんとゝよくそ
教の面をひらひこ付ゐゝ
うなゝむゝうとうある
ある書物ちこ御よを重

人間うまく父母のもと教えよく人（あつ）ならごろ我を
るろそにもべんやとあ
礼祀の間切よりけふよりよろ人の祀そこなくなう
そよ衣いえ祀のまつう或（キャウ）が若く
祀前（まえ）始おうおひれ打よべ
ようまれ（ぬ）よろ仕（つか）のうをそ
よあよまのそのみ付をそしてる（べ）りうそ
いえをそくよあよ衣祀のまつう或（キャウ）が若く
の汚気よ今く衣の事をにそうせたよそをそよああよ
よあをるいで（ず）ろよのせでうやまひなつくせ（ず）くそ
あとよまでるやうまり（ず）小（ちいさ）ねをひつでる時も用（もち）ゐに

一度（たび）にひつけで記（しる）すわよ財（たから）をしやまよ（ず）
よあ（ず）る人のそうとそうとめの汚（よご）れにつよはでる
そうあなたようろうろぐ（ず）べ（ず）
こうぬとうのこ（ず）お言（いう）ぬうしいさ
ふとりくとひそりそなをべ（ず）
の方（トミ）、家（いえ）あ私（わたし）のあいまぐ（ず）し
付（つけ）事（ごと）（クワンイ）廉（れん）なる衣をそあぬとの
あまその人をめつまのくそ
記（しる）そっ衣（ころも）になれそ用（もち）ゐ入（いれ）よのあびて
雪（ゆき）るとひつ父母（ちちはは）のをあそれ
ごそんでよ小（ちいさ）くそのひそ
おそる（ず）んそでうそ

小あやまちある時ハねんごろにたゞし理非をしらせ正しからしめ
いさめまいらせてさとしにおよびかへりみさせる（かうべ）閨門曲礼など
にてさかしきをのべつる事しかして父母のあしき事ある時ハ
あしき気をせずいかにも顔色をやはらげて小やかに
にし声をやはらげていかにもやさしくいさめまいらせ（ぐらん）
ことのごとくいさめまいらする事もしいさめを入給はず怒気
じんそこねそこなはれまつりて後あしき事をなさし
[illegible]
[illegible]
[illegible]
二度三度までいさめたれたとひおそれある父母そそれ
[illegible]

ころそとおもはずよし うやまひ孝行の道をつくすべし かくの
ごとくして三度までいさめても用ひずしてせむる時ハ父母の疾
[illegible]
[illegible]
礼記の曲礼に見えたり 父母座にまします時ハ [illegible]
[illegible] たとへ琴琵琶ひかず
笑事をもなさず [illegible] 酒をのむとも [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 三代も [illegible]

久しきおの存切へしるしをしにしのむべ
あるまじきを業を服せそこいふ
がうこ父つぎしるくまてそれ
切のつまる名誉をんまじくとふ
○孔子乃おひ、父母なきのうへ
まるおうするゆへそのおもむ
たくそのおもむきいふあるまじ
父なくなりのもとねに家をうけ
そをいひてをいひいふあるまじ
祝よくそ親の三年心をねに
ど記あるまてそのおもむきに
なかをこいふ親の
ありさまのひる事道よりおひる事

ありたたひ業をする事をおもひ
まてあるために親のなりのひ
ごとく給んうそのびがつきしと
ずふうさもよあまさを思ひ
○礼記の内則のそけふの口が若(ヨキ)
なをそるおこるひよきのをなる
る事をおひそれ父母そのをあ
いうんよおこにて悪事をなをそ
ひあるさのをなる親の名まて
とほる
○同じく祭義のそけふの事のん
祝おまを付よ厨てまつびかの

まりもたへざるべし

○士農工商の春のうらゝかなるを見よ
はるひく農節をつとめまき物をうゑ
植たらく酒ある人をうやまひ
出つのたをまもりて家をそ
るをつゝしみ祖のまりをはぢむ
民農年人の春の初日を見ひら
りをつかさる事をの程なき
事なれ共きさらぎ社おもひ
み他の利をたゝ物をおよ
物あるをもりてなきうもをつ
に隣るひが身をはぐゝしみ

○

修行のこゝろをまりて物のはじめを
まふくに上天のようひ百民おひ
まるへくするへくの春月の始終を
百姓のはじめ春をれをうけつく事
なるの恵をのそみしをかおもひ
めのこゝろをよくてゝよるまり
するつあけくをもりてあけくをもり
て父母の恵るおその教をもうれ
ぬ人をもてうやまふおのおのに酒
なるべし

○

春のるのの教よはぢまるに
なる時に春のんぎをはじむ

ほくしまたなをあらはしいさかのそこく
猛勢をのがすひとりさのみならず君の行ひあ
るごとに日ひをおねくまなれそれをむさぼ
武帝に軍にのぞんで死をうくるの
難ずるがわが身が父母の物
すのそこへまでもおもひやぶかきこと難
うと難るを先儒の説よみこんでまぶ
をもたずる間うち身をまもりてそなひやぶさる
を春とそれそに君よはたく紙紙和朝する者となりて
君のほまそに歌をやめのひまをぞ見しんより
附わが身を君よまもるをそ見しんより
戦場よりのそこで死をいとはざるを春を

そふるうとしんで人の答よりて寝る法
孔子はの答ひ、お引(ケイ)とて
おうありつゝお顔よりいれそをする答二つおいてなる答云に
足る答はお男が諺(ゲン)かい葉をそう女ふくろさ不一(ヒト)なりて
答えおふくびある間よ歌よ
なる答ひなりと説ね

君臣乃部

礼記の曲藁よりけふが君
よ付(イ)前日(ニチ)ようとの答ひて
ゆあを賛あらひろ身をまよむ君よつけをんと
君のとりよおよ事
事ありをんとおふ(シヅ)答よ書生て

あらまあたらしきものをたくさんに
用ゐ、孔子の門に入る者、皆堂に昇り
給(レシア)をうけて、君のごとく尊ぶ。
ゆゑに、子貢の言、君子の容(ヨウ)
おごそかなるをみて、孔子の門に
入りておそれ、子張の容、
おごりて、門にいりおそれ出ざる
がごとし。ゆゑに、子貢、子張に
及ばざること、遠しとなす。
君子をいひそこなふ。
君の作をうけ、
子張の容、
賓客をもてなすに、
君のごとくにあいそうをせず、
君席をつくしてもてなすことを
ひくしとなす。是もまた
たがひに、その
孔子の門に入る者、皆堂に昇り
給をうけて、君のごとく尊ぶ。
ゆゑに、子貢の言、君子の容
おごそかなるをみて、孔子の門に
入りておそれ、子張の容、
おごりて、門にいりおそれ出ざる
がごとし。ゆゑに、子貢、子張に
及ばざること、遠しとなす。
君子をいひそこなふ。
君の作をうけ、
子張の容、
賓客をもてなすに、
君のごとくにあいそうをせず、
君席をつくしてもてなすことを
ひくしとなす。是もまた
たがひに、その

たちの御時も門の中に立給ひけるハ中ハ君の出入の所を通
ゆゑあしく給ふ時ハさしさはりをその君の御座前を
まがりたまふ御時ハ君をつねとおそれてかしこまりひて御
ゆかの上を通り給ふ足もとつゝしみ給ひことの外のゆるりと
あしたなくまたののみだりなかりたる御衣ハ老り給ふ時ハ地をする
事一尺ばかりもすそをかけ腰をかゞめて其所を去り給ひ
もし給ふつゝしみたゞしく御前をさとりしめんためにぞ出入によ
をつき給ふ事なれバ大事なるにはしたなき給ひく御いき（ニイ）をさげ（サガ）
まゐらせ給ふゝしいさゝかとのぞくに立給ふてから御あきよりたり
給ひさばさし君の位ありのへ立たゝれ御礼をのべまたふ御
うやうやしくやすらかによろこびの御顔色ありおちつき給ふを
給ひしかり程して君をぎんて已が居所の位ヘ帰り

又御身をかゞめ給ひしよのひ御庭をさがり給ひしハ
又御所作義給ふやうしくつゝしみすこにおごそかなる御
よろこびあひしとぞ
孔子の君より御膳のあまりをたまはれバかならずあ
らためて席を正して自らかしこまりいたゞき給ふを又あま
りを家内の人々にもわかちてもろともにいたゞかせ給ひしこと
生物の奥贈を君より給ハれバよく熟し料理して先祖の
廟に備ヘ献文（モン）いさゝかあるをおそれバ田（おき）にもちし
つかハしてこれを御飼給へり
孔子君の御相伴にて食し給ふ時ハ君ハいまだへ食
めて食物をおしへ人を御膳のたびごとにまつり給
ふことのなき食し給ふかしこまり孔子先をこゝろみて

なりて御つかひをつかはしまされ
をあいさつなどありて
給ふ
○礼記の曲禮より
ぞ人のうつびあるやうに
とくかくをするやうに
長幼之部
○垂手おとなる人とゐて
姓名の下をあるひは
敢て礼儀の御人態の
勇人となる
なるうへ
○父母のいまして
若き時あるおとな
そなたうしろなどにあるは
びて天理の本然より
○父母のよびたまふ
なるやうにて
○礼記の曲礼より
わが父のとくやまひて
いそぎ
つくつかをかへ
かびてさぶらふ
若き時のおとな
○礼記の曲礼より
父のいかなるおしへ
たるはよ
をそらんじてよくおぼえ
ゆくなきやう
○父母のよびたまふ
なるやうにて
○父母の本然の若き
ひとりをうやまふ情のた
ひとりをうやまふ情のた
○父母のよびたまふ
なるやうにて
○礼記の曲礼より
わが父のとくやまひて
いそぎ

わが親の三年の喪
○礼記の曲禮より
ぞ人のうつびあるやうに
とくかくをするやうに
長幼之部
○垂手おとなる人とゐて
姓名の下をあるひは
敢て礼儀の御人態の
勇人となる
なるうへ
○父母のいまして
若き時あるおとな
そなたうしろなどにあるは
びて天理の本然より
○父母のよびたまふ
なるやうにて
○礼記の曲礼より
わが父のとくやまひて
いそぎ

とかざきが妻へ文を送りやることを
○わが姉ぎみもそも知よう一張弓をみしてる人をが
父のごとくおもひつつまひつつあるべし
○我よう十年ニてみしてる人
つかへ六年ニ生けしてる人
ちあらく時しおあとすぐぶく
○ニ一生けしてる人の方一ぬきれ
をもてまづと杖とを相(レコウ)俵するねえをかに幸てみた
ありひくくびきれぬの人と思ひをたをるたをを拾
糸すること〳〵あるべきよう物
うぶぐ〳〵言ふぐうに辞退
物うへうとそこ言ふるこの地

○師匠しる人とつきそちたをもくは
うをしてねぶりをぐうべみわを一人を
ゆきあのてぶおくさそうそこ
ねきこと浮用もあるぶうけ
べ〳〵師匠ぬひうけをかを
物たの終津なくみそうてそう
○美人よそぐびてたうさをあぶそん
そ人のむのひえ終おを用ぶ
えふ方のをおそとひうを
○そきけしる人あまなきことのを
きことのあのよりて名(タテンムキ)のはくは
とうふけてねをひうけあそ

中とゞ〳〵一ねのいさををふまぢきあめのなり

○如水なることのきゝたまかひしるひとのいかりて掃除をせよおきてあのまにまにて指おく石のよ
弘法をもちゐるにはあらねどもよきそこきをおそはきたる神さびたる塵をも人のめ〳〵ゆかぬまに〳〵
ちりをも人のめ〳〵ゆかぬまに〳〵おくべきにあらず

○庭よりは家の実をおくべきにあらず
まきのきかうのきなどのあるをこそそとぐ
けだし一天柱あいをおそれ

○師匠のおのかなどの打ちたるよをあらく

○庭〳〵にはうつくしきいしをおくべきにあらず
のうおとそを雑草をぬかずまぢ〳〵
と同じくにいひきうをいひおきたるよりは
形儀でくしてよき人のいひおきたるよりは
人のいひおきたるよりは
そもよ礼をかたくわがこゝろをもつて
うるひとの事のをいふべし

○師匠のうおよきはいかをふまぢきあめのなり
詞の終をもまぢ〳〵

ふるまをといふ人を何とか紙をあらて先そうけなるべ
○客のおうそう物(メス)そろ猫をそろる時いつぢ死(は)ぬくべ
○酒しるそく後たら人のくろ
しのびしく泊ひ我のくろ投くろ
をそんなでたいろろあるそ
はいろあるべし
○貴人のくろの相伴する時今をとかわりて前の事を向うけ
ろうあるかおそ又紙をそ
人来りてくろをれをうかひ
こと有るる人のるまかしてほぐのまよまろ
○早く行ひる人のくろ

やくんのもとよ教おろくろ
をそうてつそんくのむべし貴人のくろ
ろかぼる田いまへのをそだまろ
○貴人より行そ紙たまつるぞむせぬそのく紙
時過しそ泊おろくるとふ田宅のそのくろ
○貴人のくろ紙のおいて客のお紙のおそかいろ紙をつおろる
そそ到をそ紙せぬそのく紙をかわしあおてろ
○貴人や客のしある用をする事るれかろ
○貴人のお泊のあるる相伴してある時の物をそ
けるお時のまの人をそうそ泊着まる
○客たつもぐる貴人にそ
まるべし左そをあひそ

通論

孔子の門人の内で、顔回の如きは、

親の程なき子の親を
あやまるあやぶひそかによいまあらう
つよくいましめべうん親をつゝまも
んをたくしまの事親のよふに
三年の喪をつとめべし○右よつて
あやまつ親を殺すつよく強し
親をうつてを害の後そのうを
當一生ふたゝびたゝずして
らん親となるべし○三年の喪を
法師になるべし○あやまちんと
思ふてあれいまもんよ
つゝまる事親あるべし

勤ふつゝまるべんのうちその喪三年がる勤べ
○棄妻するがいゝ理てんとものかをんとをん
三人ありひとりの父母が法師物ゝこと
法師ゝ居ゝれをうをも
うくゝ人とる事ぞめる
物をもべし○舅の墓のいゝ右ゝ法
法師ゝ居ゝれをうをも
別ゝ人ゝ物をもべし

ととのへまさなれバたゞめのみことがかり陰陽となるけいくし
○荀子にいはく人に三つのふしやうあり一つにハいとけなくて
年長けたる人をうやまハざる二つにハいやしき身のたつとき人
につかへざる三つにハ不肖にして賢人をうやまハざるこれ三つの
不祥なりといへり
○又いはくかんくんの心は日月にたとへたる事とゑんある
なきにあるへきの事なれバ人をつひやし弁察をもつて
んばあけられんにおけば其まゝにハ君臣の義父
子の親夫婦の別なり

倭小学巻之二終

倭小学巻之三

敬身篇第三

○此篇にハ身を敬むことをのべられたり天下にありとし
ゆるものひとつとして敬をはなれてなりたつことなし
孔子ハ君子ハ敬しまざることなしといへり身ハ
いづれもおやよりうけたるを敬むとすてつ根本なりとお
ぼえずしていとおもハぞそれにふかくとたゞつかれぬ先祖
よりつたはりきたるところの血脈にして父母の残し
給へる所なるれバおろそかにすべからずあつかふべし
へし父母ハ草木の根のごとくに子ハ枝葉のごとく

心術乃部

えんしゃ
丹書の太そらを周のきぎとの
ごんようのよにきこえおそれて
ものくるるね第也
るひてのもんぜのそこよひうまねところも也
ひそのらうえんぜんと作ものゆ

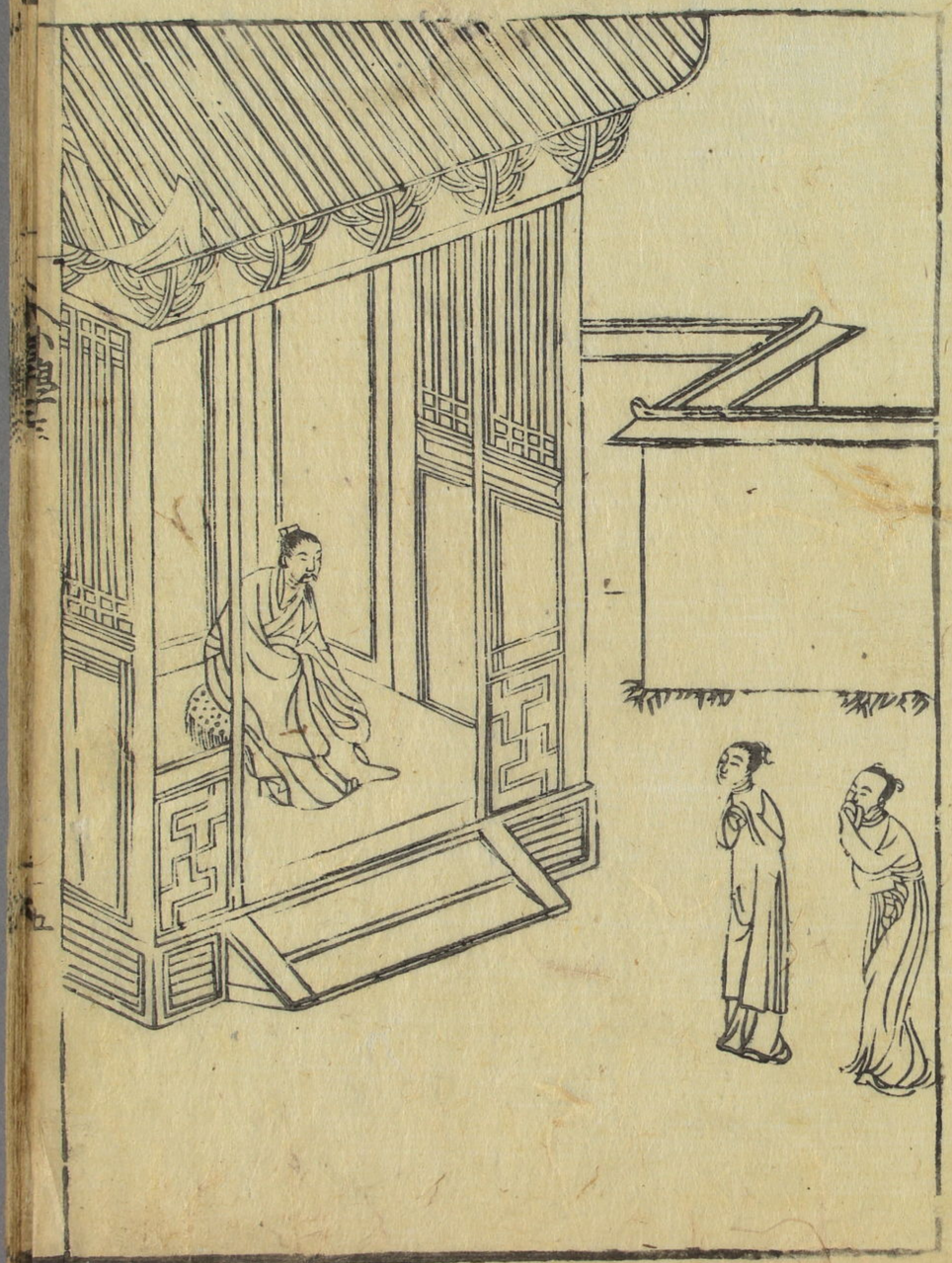
へよ。そのごとく天道よりひてその身をうへゆく報也
そこれよたびひてぜんぜの報ごとに懈怠のこころありてぬ
まるうへんぜのこころおりてそ
むくゆよりびまぎりひとまものべしてそ

○礼記の曲礼よりけのごとくに我
つとたくさんもうやしたしべつつく我
ものごとくそのんたくさんもおかふも
かるくしうびに業をもるやうにゆ
多人ハそのこころたもつひありそこを業とづう

ようつゝしみて卒爾なるすさみをいましむるなり。それ人とともに
たゞしきをのぞくのごとき人ハ、おのがみをわすれてたゞしき志
なき人なれバ、人の師範となりがたく、おのれをかへりみること
へてたゞしからしむべし。

○人とうまれておごりハ長じやすく、欲ハかぎりなくほしいまゝにせんとす
くるしみをなすものハ気質にひかれておのれをほしいまゝにするゆへ也
めつくしつゝ猶その常にかへすハ人のかくれなきものゝ
きはめかたくしておごりのこゝろはなれがたく
らむ飲食男女利得の欲にあたる人ハ家を失ひ
身をほろぼすものなれバ、つゝしむべきことなり

バおのれがたのしまんとするにハ、おのれが昔ごこ
ろの利の自然なるところにまかせてたしなめ、利をもとむべきものなれども、その
ものゝあはれなることをしりて、そのしるしをうるの人すくなし。
○福ハ人のもとむる所にあらず、そのうへに禍ハおのれがまねく所也
されバ人ハ仁をおこなひ、その身をおさむるにあらざれバ、その禍をまぬかれず
しかるに人のつゝしまざるをもつて、禍ハつゐにきたる
まのあたりその身に失ありといへども、これをしらず
てやぶれて後にその失ありて安楽の地にやすんぜんと
まねくものなれバ、人ハよくつゝしむべし
失ありて後に悔るハ、その失をはやくいましめ慎ひ。



てだごきん表裏すこ
ひおそれてもどうくそ
すくもりおくそくもどき
てもどうくよりどうこ
てしぜとそそいうくう

○たゝよのぞんでハ利慾のことをいふてこれ我
わんすとをりのべうそをかゝへ類よのおゝくそれを食さ
ふ程よこゝもまりたゝハのらともおゝくそろぐまん
とそべうしんぺとおゝそひいろてごがうんすと
りとじべうしんぺ抔と配ふうそごろ附よおかうくす
とりとしべうそ
○何のとおこるまもうこうさのおゝハ推量
とそごれと交断そへうまうこうおしくとへよう
うぱれいうくおりのかいうおりまて食後
もろ附ごくまうおもりくとたてんと

○おのそおゝもし弁ぞべうこうハ矢うこう抔也
孔子顔回をおしへ給ひしハ利慾しいふ抔ハそうし
そべ乃礼の機能をおしへ給ハそうこうまりのもぞくの
くの乳機おゝ抔るれハ抔機能産所行のようこうべれ
よたゝひうくのハいひもせぞぞもせんぎてもせぞ。
こゝこゝこゝこゝもも抔也ごり給ハ礼よ
たゞひうのハぶこれとのまゝこゝこゝそ
通るうのまゝぞ也
同じく作うよこゝへ給ひこゝこゝ礼ハつよく

こそいひおそれ離別のたぐひも
礼記の曲礼にこれ礼は上下のさかひをわかちてそ
もろくの礼儀あるふ或ハ上下をあらそひ或ハ上下
をへつらひて上をあなどるハ敗亡をまねくの类ありひ
ていまうしめ禁おそれべし。又ハくゝ伝ともおもひべくて。
おゝあるゝ或ハくちるゝこてぃもだ
てよるれよぐろもふまれ礼ようわをとりていふ
め禁おそれべしだぐくわ分をあきまて字よりひあを
こそぐそたもくくそのこと家と伝ゝたろうぐさ
るやうよとそうとぃまりのあり

おるぐく楽記よりけうくへ再よたぐし
うぐろ多ゝろそ同よりそれりきろそぐ
淫乱するう音楽無愿ふ礼儀ぐくく
うけいれそがくのぐくく同ゝもよいまりわもくこひ
時ぱそうゝまよひめうゝ分へふまわ
うゝそおてろかゝ分ゝ同ろう答そこと
ようゝよぐ分へ面ろまるとくさ
こふぱたぐもくそおのぐくく義理よう
うのあも

やうよそうをもつてくらべてきまるのはかうとつきとめるのがもともとさゆつよわもともとうまのあてるのひたぐちうへざうりうへくつうへくつしたうへ

○管敎仲がのひしの民のおのの上中下のうちれいおありのあつまりてするをいはゞそしやくゆふよそんうちをりよりさがりひとりありしてその感をおもうてうやまひけんすとおそうごとくほうびをおもひものの上の位の民をうりはらひてうんぷ貧窮ふうきをといはゞめぐんのまつりふ利をしきりうるのがれ

るのごとくにかはりつのをうりをもうりうぐるをもつておのれが中の位の民をうりはらひて

威儀乃部

礼記乃冠義にいはく

貪戀しきものゝおやぢ人をそしりてもいはれてもいかりうらみず

よいくれいぎをもつて冠とき

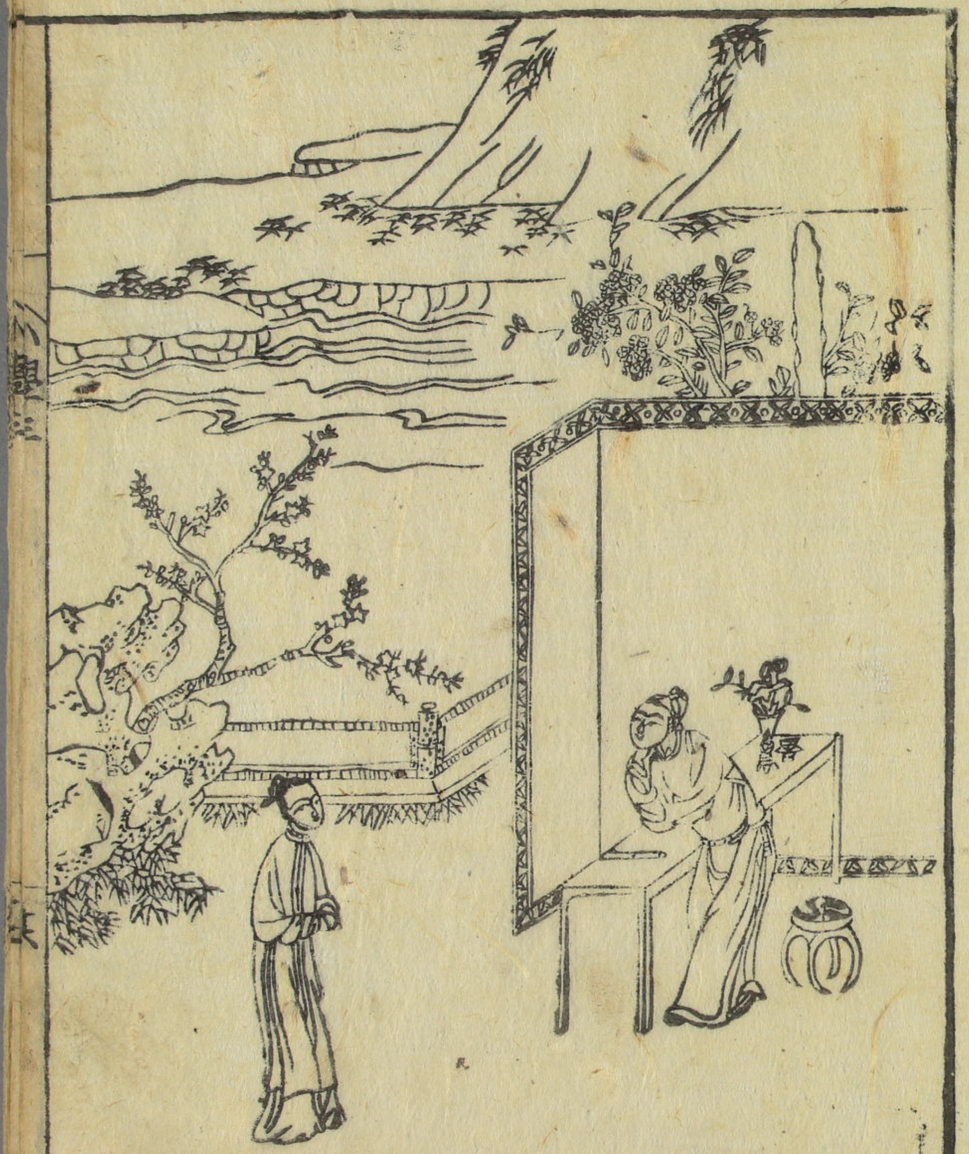
客とありて他おへゆきそへのぞむこと
ありとそも拳をへほとくこころもちあせ又他おへゆき
ひよりさ客数へのありこんしともろ時ハうちべしうべ
くりをべしのれうきさふ家の三人もありこべしまひ
うよ拍りの純度数のあへきてゆうふ家の三人もありこべしまひ
そくそへ人客きこへもハ家族そうのあるもこんぱ
てこのごべりこん他おへゆきさかてあけて内へそうの時
きこのこべりこん他おへゆきさかてあけて内へそうの時
てくり他とつきこおるこうこともまへさうあもせ
それもへ人のこうこうとをあるこうこともまへさうあもせ

ありこうあけてありこうる声されもあけをぬぢち
てありこうと我あけてくれハズりのごくこうぶ
るあもそれもこうあくこうぶ
おさそこぶきもべりこんぺの蓋ともべりこんぺの
ろこうもべりこん産ようきそへいくこうこと
つきもべ
○同しく玉落ようのうへきまうくはひいもろ
うよゆうくこそさりぐ我たうもへ
あへぱつきこそれてぎやまみうこうやうあり
ぎ酒よみうのきかあむあしぬうこうハ

おもくふむべし。手のかたちハ恭のごとくせよ。拱におそくやくちくたるべし。目のかたちハたゞしくまへの方をみて、しりめながしめなどすべからず。みだりによ口のかたちハふさぎとゞめて、ものいふまじき時ハとぢたるべし。声のかたちハしづかにまろくいひて、せくべからず。頭のかたちハなほくまろゞして、かたふくることなく、へつらひむけるやうにすべからず。気のかたちハつゝしみしづかにして、いきあらくすべからず。立時のかたちハ徳のある人の中にたつやうにして、よくすぐにあるべし。色のかたちハいかにもおごそかにきちとして、ゆるがせにならざるべし

○同しく曲礼にいはく、坐する時のかたちハかたしろのごとくなるべし。たつ時のかたちハものいみする時神前にあるがたちてつゝしむごとくなるべし。かたしろとハまつりする時十歳ばかりの子を神の代としてまつるに坐せしめておくをいふなり

○同しく少儀にいはく、人の心のまだあらはれざるをおしはかるべからず。人よろこびいかりなどをもしらざるに、かねてそれをはかるべからず。人のあやまちしらぬやうにいひなしてかたくおしかくすことなく、へつらひぐるしきおのれがことをおもひなすべからず



○湯殿よりけうの興車の内
くゝ物うべくゝゆびぎ
優くづくゆくうう
○乳記の曲礼よりけう内づ
上へ見てあげてうべうく
下とそうべくゝひぐまくの相ありぐこれ方でかくもひさ
うべくゝひくのかくまくく
○湯殿よりけう礼ぎの報ぎ一
門あう糸ぎそへ海ぐくれんぎ
あくぎよりてぎうお恵ぐくも

給ひしゆひぐくも物ぐもの給りぐで又宝廟朝廷か
くお給ひて礼儀ぬぐうぐれおりてへだの殿ぐくて
の格ぎくうりぴべぐくの八万理てたべぐぴぐく、と
いひあ給へぐくいひ給ひぐも又りうたべ
るやくのぐるぐぴくあも給ひぐ又朝廷（注一）
給ひてぐれうぐのくぐ物の給ぎそぐるう
ぐぐうくいひ給ひぐれうぐ上のくぐりれひ
給ぎぐぐとやりげうこべくて七
ぐくくそくゆくんぐそのぐくぐ
祠くくりぐ礼ぎの位殿ぎ服ぐく祠べく殿

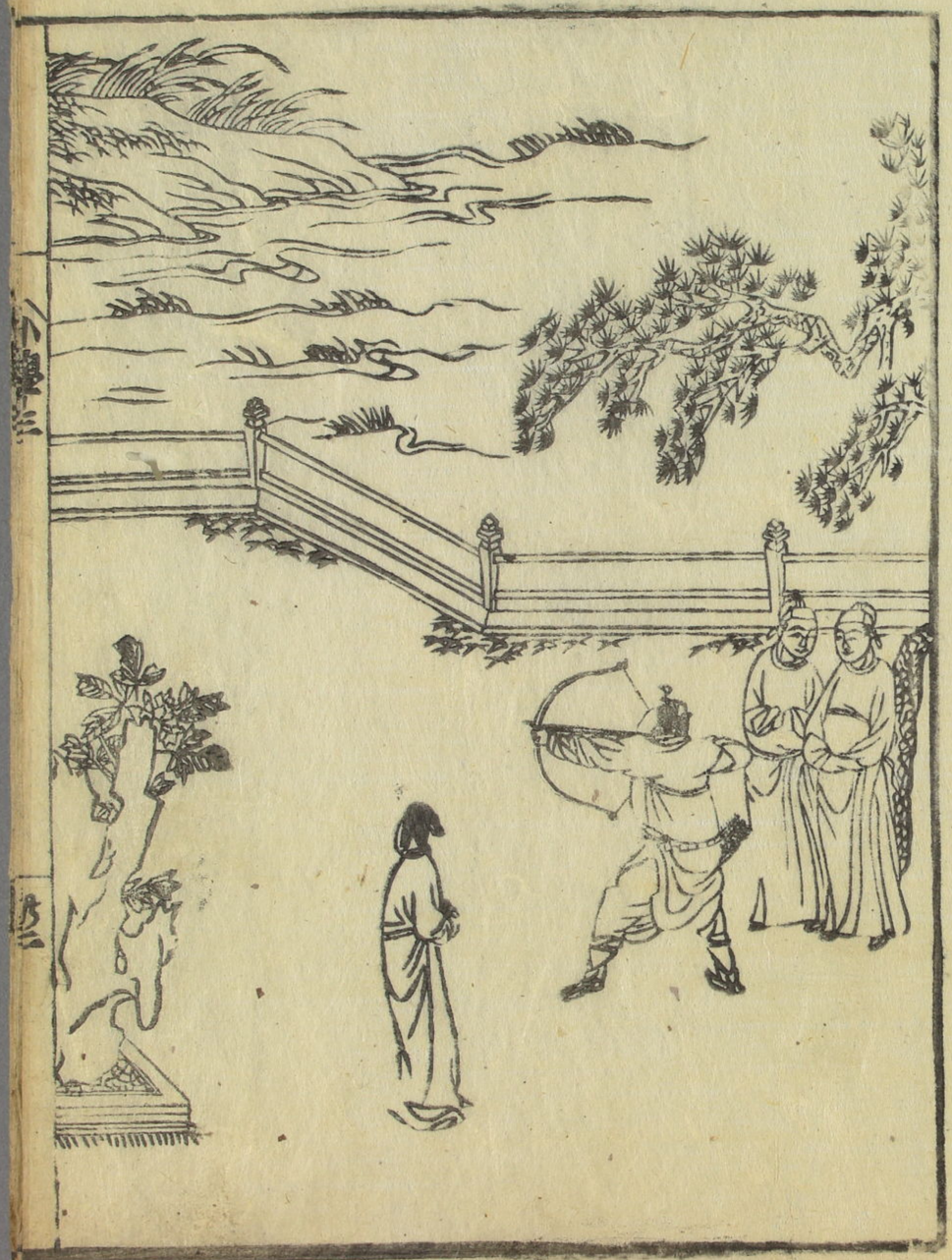
ぐうちまたはうでぷつ
けものてうけれこてあ
るべきぞ時よう後へ別
いつぞうのぐうもの
時よりひきつゆへまり
ハ乳をつきどうてお
るぞ時ハ乳ふきどうて
おもて腫の腦をやぶ
ハ乳共に
ざうのハぎうひきつ

だうぎう上のもうの
今そうのやうのおり
おりくとりハ乳
へばつくやそくる
ありひうのとおる
ひうのをぬぐうて
木のはをとりて乳
うる位を度うへ
つく ぐやそくる
ぞうのぐうもの

くつかならびくせ是にあひまつてハ陛下とつかへ侍に
に礼儀をたゞしくとゞめんすべからず陛下にあひて
ハ君にハふまへの忠をつくし友にハ孝順とかくべく人の父兄
にあひてハ其うやまひのをおこなひとゞめ心わか
なきを人にりかうすとすれにあひてハおやゝかに九族に
孝行をつくすとなへ孝順とかくべしまでの人にあひて
ハ忠信慈善のたてしゝきみちとなるへ賞にあひてハお
のれとつくし世の道ほうにあそぶ信のもとにかさ
ねる事をゆるし世をの雑様をやめてそれくのあた
ふるものとりにかしこくはなれていのち食儀とする

時ハなげきかなしミつゝしミて自然に感化せらるゝありて
善人となる事也
礼記の玉藻にいはくもしはげしき大風大雨あり
ばそれハ天のいかりなれバかならずかたちを変じ
うやまひをあらはしてをそれつゝしむべしたとひ夜なり
ともかならずおきて衣裳をあらためてかしこまり
ゐるべし
同じく曲礼にいはく人と列座してある時ハひざをそろへ
てならびの人にまじハりてさゝへべからず
物をとる時ハそのかたはらの人にとらせてあとにハこれもた

くよろづてごとこもまうでくべく
ものしはべりおのかうへゆさぬ時
なれよりてうする物也
○おほやけ射芸(いげい)よりけうの門のうち
はしらうち物のうち門のうち
まとをそれぞれうちとくあり
うくゆくあやまちのものなり
あやまちのうちたるときゆくるうとそ



衣服ノ部

儀礼の士冠礼よとけうら二十まるれ吉うて多
らこ容へそびわつめえ服さそうよ姑加丹加二加く
てこる冠とさせうへいそよ改者あり始て冠さて
るかいそよ祝まいとうかんちがいてげるさ時
のこうござとふうそてのしうまれつきたる
を逸よまそびはりうべしおのづて天通よう
るひいのちがくさいもしあうべしいこてび冠
さもそう時いそよ祝まいとうぬ滅低とう玉く仍滅低
はたうそくしてそのは逸とうて玉まいおのづてと程

ようひして多命七玉ふ冠とうて多
人とりつそうひ冠とさ
男とはうて玉人のこ
玉角まやくその男は逸と発せくぴこうれ
命とめて天のさいそ
うれ和まいのたうさ
と内のこうといひこ
祝せんすといまひて
礼記の曲礼よりけうへ
冠うも衣裳うも玉ろいろうぶとそしませう逸

これはそうさうに喪服よりは少しはいうるなり
辛うり肉そ父母
喪ともかくそいうるなり
これは兄弟うるとれは親
うさうゆへよ一生あやの夏
んをありうりてざろ
ざそれは親よそれこ
ざうりうりくをしあ
海魚よりけうへ純の
喪とそう肉よ練服の

ばいうるとれはそうよ甚しく
ありへしよゆへうりそ
へ父のそうれはたへしくさの二うへ
ほうびなのおうきほうう
けきほひてざへくそ
喪ほうりおびひそ
おへ玉やおびほうそ
ろさうもこうもぐろう
らひよそきほうそきほひそへくのこよ
乳へくろさと那ひ武住

ばくの者ゆかともふ
給つぐらんぐうるれ
○乳記ハ玉藻よりろへ幼サそろ面子にへきそへばかご
ろも又はきろへハ衣衾ときろべうろへ屋ときろ もも
かぐうとせろ抱也
乳母のふひーばくくうろれそでまろころざし
てうり指ばりきご衣衾ありき食抱ときづうころろ
さうろまろきろ抱也そのれハろときまへられハくやや嬢
上下のさろくおうろれそのぐうくさろゆくこぐうり刀の衣
嬢ろうろ潔よハぐの悪衣面食お抱うりしうきまへ

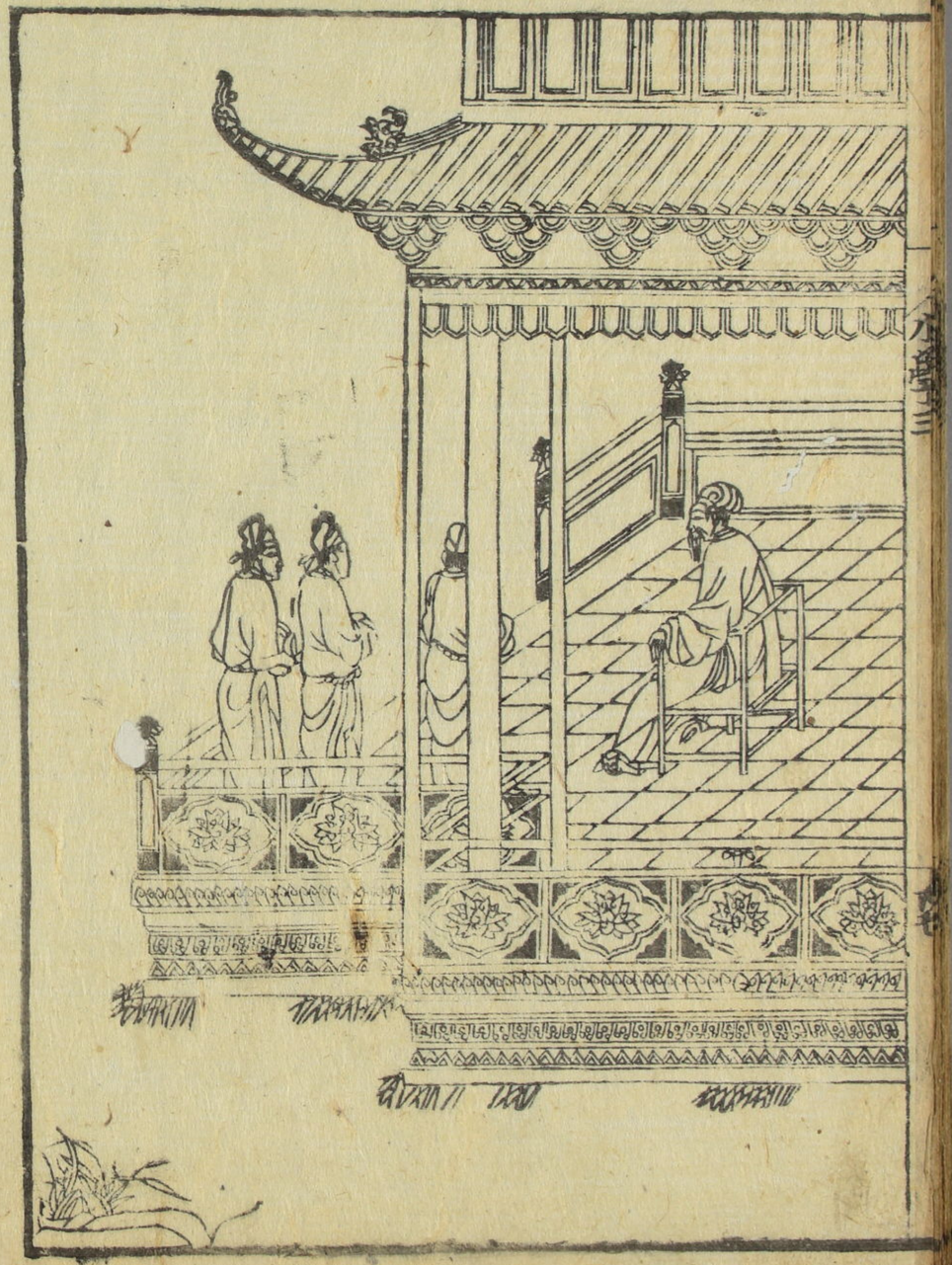
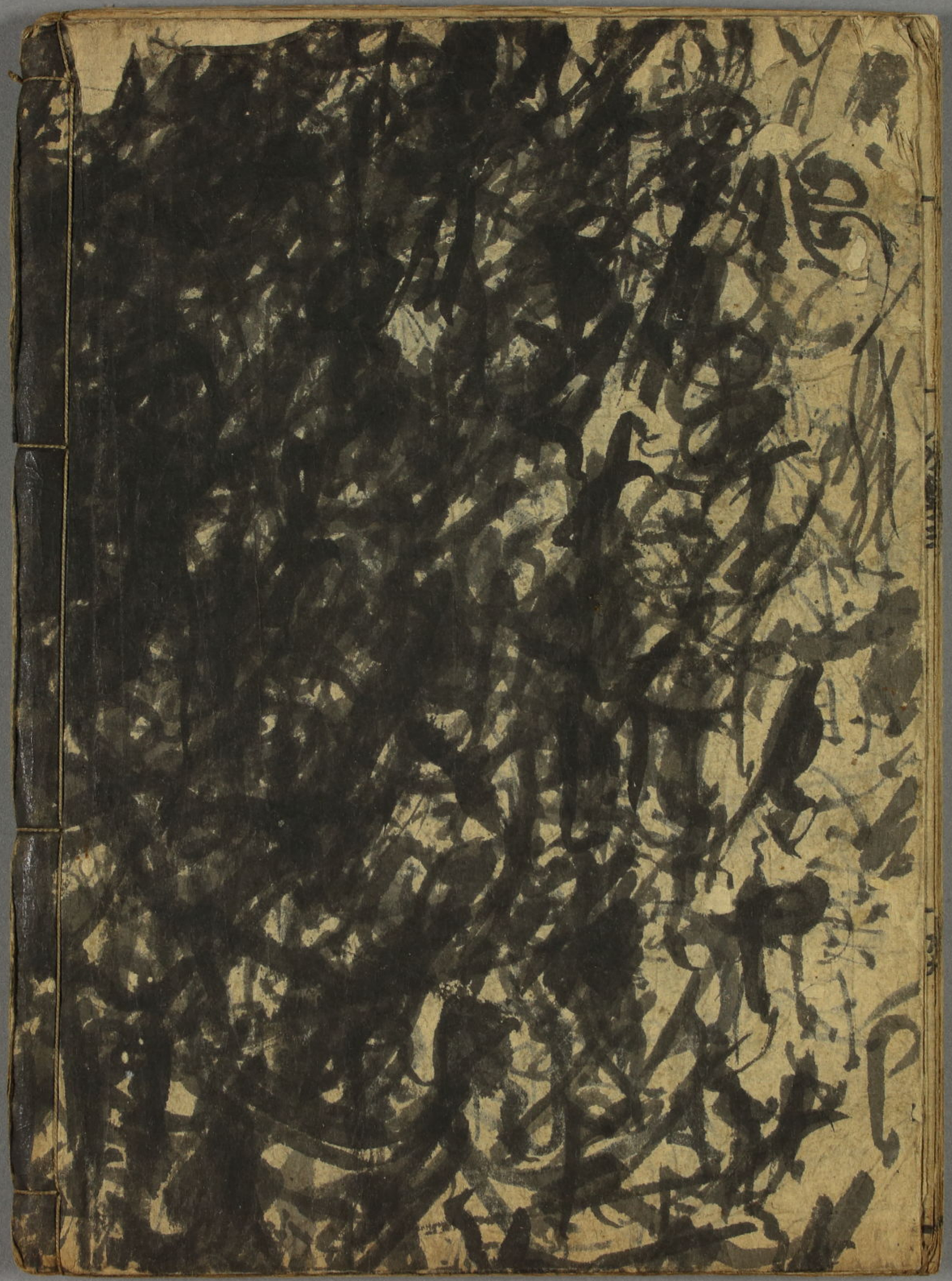
きうりてきろふそちうろ抱ひ四そへ衣衾のうたうご
ろべうへ美ぐまよまろきろうろ抱
乳食抱おのそきろうろ
しおそくて刀のそ
ろう少ごとろふそを後端そうまたうへきろ抱

飲食ハ乳

○抱乳ときけっハくなろ香そ物そもの何ハろくく浪
ぐうらんとろべうへ飯ときうろふぬぐまへ
飯ときふれけごまごろ本ろのおりくりびうりぬその

まふくうべうくびのかしらとそ
うぐくもべうくうくう香ぐくう
るうくもべうくうくう焼焼うく
てのうくびうくうくう犬なりのうくうべうくう
そもあうくう物とつうくうくびうくう
て飯とおげさまさうんとうくもべうくう
ううくうくてぽとそのうくうくう
へてぉんぐくもうくうくびうくう
びうくもとうくうくう汁のまへ
のうくとむうくりてうくうくう

そうくうくもの汁のうくうくう
ぉうくうくのうくとのうくうくう
あうくう肉とうくうくう
くへーぽうくう肉のやうくう物
いつくもべうくうくう
礼記のサ儀よりけうくう
そうくうくびうくうくうくうくう
いやむへーぽうくうくうくう
くうくうくうくうくうくう
なうくうくうくうくうくう



禮記ノ玉藻ニよりけるハ容ヲ
てるとき耐ハ禮義ヲ礼ハ生
るうがうゆるさ耐ハ若ハ并
支ハひつじところをべりし
らびにそのハねとあり士ハ大いのこそうもっぺ
てとそざけるゆへよたしひ礼義ハあり
おありてこころしひそ
ろさそぞりくころし
あるく樂記よりけるハ
いとさ酒とうくとる